

## 秦伯未批校『医学見能』について

浦山 きか

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部 客員研究員

『医学見能』（一名『医学一見能』）は、唐容川（清・1862～1918年、四川・彭県の人）の手になる一般向けの医学書である。唐容川の主著は「中西医匯通医書五種」と総称されるが、秦伯未（1901～1970年、上海）の批校によっても行われた（力行書局印行）。

『医学見能』も秦伯未の批校本が『秦批医学見能』として伝わったが、秦伯未による序文と按語が附されていることが注目される。「中医学の父」秦伯未の、「中西医匯通派」唐容川への評価を窺い得るとともに、20世紀における中国医学の一段階を表わす資料と看做し得るが、管見ながら十分な検討がされてきたとは言い難いため、本発表にて本書の紹介を試みる。

『医学見能』の書名は「一見而能之」に由来する。一般人と初学者にも可能な治療法を紹介したもので、巻首及び巻一～巻四から成る。巻首に概説的な「診法」が当てられ、「五臓・六腑・経気・望色・聞声・問証・切脈」の七項目に分け記される。巻一～巻三は「証治」巻であり、巻一は「頭骨・兩耳・眼目・唇口・鼻孔・歯牙・舌本・咽喉・胸前・大腹・小腹・脇肋・背上・腰中・手臂・脚腿・前陰・後陰・大便・小便」の20項目、巻二には「寒熱・嘔吐・咳嗽・喘胸・失血・遺精・言語・心神・斑黄・出汗・腫脹・飲食・起居・倒僕・掣動・虫蠱・鬼祟」の17項目、巻三には「婦人調經・婦人安胎・婦人保産・小兒外証・小兒内証・外科瘡証・刀傷跌打」の7項目、巻四は付録として「救急」が当てられ、それぞれ総括的な症状と治法が記され、治法ごとに七言四句の歌訣が添えられている。巻一～巻四中の症状の総数は265例である。

秦伯未批校『医学見能』は、1924・1929・1930・1934・1982年に印行されたことが知られている。今回は1982年上海科学出版社出版になる李融之点校本により検討した。

序に「甲子八月上海秦之濟伯未氏序」とあり、1924年に秦伯未序を設けたことがわかる。唐容川自序に附された秦伯未按語には「甲戌中秋前一日記」とあり、1934年に「蜀刻本」との対校を加えたことが看取される。按語は全92条、うち13条が「蜀刻本」との校勘である。他は概ね処方に関する補足であり、巻首・巻二・巻三・巻四には秦伯未の思想と環境を窺い得る内容がある。

巻二には「巻一卷二皆属外感内傷雜病，先由形体，漸及内臓，従表従裏，層次井然。至于辨証簡要，用藥平正，在繁復之病例中，能作出提綱挈領功夫，極不容易。治病雖不如此簡捷，然略知大法，不致藥石乱投……」と注し、『医学見能』の編集方針に一定の評価を与えているほか、巻首「切脈」に注して「滑伯仁云，脉之綱要，不外浮沈遲數滑瀦六者，以其足統乎表里陰陽虛実冷熱風寒濕燥蔵府気血之病也。又按，中医論生理，主重臓腑経絡，論診断，主重望聞問切，以現代科学視之，自多缺陷。但中医辨症用藥，全頼于此，越此范畴，便無頭緒，故唐氏此書，本為不知医者說法，而首先提出，殆有深意」とあり、現代科学の視点による冷静な中医学評価を示し、なおかつ中医学の本質について思い巡らしているのが興味深い。

巻三に「婦科最重胎産，小兒病証易變，宜送当地医療構検査処理。本書所載，雖有可取，幸勿依靠自誤」，巻四末尾に「在倘遇中毒等情事，宜急送医院救治，切勿自療，以免耽誤時期，只要只要」とあり、素人療法の限界を示し、医療機関への受診を奨めている。

以上のことから、20代前半の秦伯未にとって『医学見能』への批校は、当該書の校勘に止まらず、中医師の職能と中医学全体の普及について考慮するための得難い機会となり得たことを示しており、さらなる検討を要する題材として位置づけられると考える。